



シリーズ 子どもたちの発達

賢さの基礎をつくる！ ～乳児期の資質開発と学習指導を考える～

小学校教育の在り方が揺れています。早期教育であったり、ゆとり教育、総合的学習などなど…。子どもが大きくなればなる程、個と全体の学習指導のバランスはどこに軸を置いて考えたら良いのか？と混乱している様子が教育の方向性の一貫性のなさから見て取れます。そして、それを受けて、乳幼児教育にも色々な考え方、方法が入り込んできており、多すぎる情報の中で、「子育て」も混乱している状況があるように思います。私たち乳幼児教育、保育に関わる保育者も、自分達の視点や子どもの教育について捉えなおし、整理して考えてみる為にも、今回は「子どもにとっての学習」と能力開発ということをあえてテーマにしてみようと思います。

<個の尊重と個人差をふまえた学習>

例えば、子どもに早い時期から学習をさせて、「優秀」に育てよう！と考えたとします。しかし、私たち大人はその「優秀」さをどのようなものとしてイメージしているのでしょうか？！「優秀である」とは、どのようなことでしょうか？！

少し前の時代(30～40年くらい前まで)、「優秀」さを示す基準はいわゆるIQと呼ばれる知能指数の数値の高さが重要視されていました。つまり、生まれながら遺伝的に知能が高いか、低いかにという評価の仕方がその子の能力の「優・劣」を決める評価の主軸でもありました。

しかし様々な人間の能力が研究されていく中で、現在では、先天的遺伝的な知能の高さだけでその子の能力が決定されるのではなく、ほとんどの学習は生まれてからの環境要因と子どもとの相互作用の中で培われていくものだと考えられるようになってきました。にもかかわらず、知能の高さが記憶力という学習を促進する上での重要な能力と結び付けて考えられること

で、今だに、この IQ 知能指数の向上と記憶力をセットにした学習方法や学習教材がブームとして入れ代わり立ち代わり紹介されています。

では、この知能と記憶力ということをどのように考えていけばいいのでしょうか。簡単に整理すると、記憶には種類があるということを理解する必要があります。

記憶には、応用力がある能動的記憶と、丸暗記などでそのものだけを覚える受動的記憶というものがあります。これまでは、この受動的記憶によって知識をたくさん記憶することが知性や知的さになると考えられてきました。

しかし、実際にはこのような受動的記憶はすぐに忘れるか、ぼんやりとしたものであり、後に応用することはできないことがほとんどです。ですから、本当の知性として獲得していく為には、大人や教師が教えたことをそのまま覚えるような学習ではなく、その子自身の知能に応じた方法で、自発的にその意味を理解しながら能動的な記憶として応用力を育てる学習が、知的発達には重要だということが明らかになっています。(ピアジェの学習理論研究より)

つまり、知能の高低で子どもの能力を大人が計るのではなく、子どもが自分にあった形で学習しつつ能力を取り込んでいく、その時期や速度の違いがいわゆる「個人差」というものであり、一人ひとりの子に、その子にとって適切な時期があります。多少の早い遅いということが、そのまま能力の差と考える必要はないのです。それゆえ、一律に子どもに教え込む学習の仕方ではなく、その子一人ひとりの自発性を十分に尊重する学習環境を整えることが、その子の発達の時期や速度を大切に「個の尊重」と言えるのだと思います。

<子どもが知的学習を積み重ねること>

また、「環境を整える」ということも、もう少し知能の発達の面から考えてみましょう。

私たち大人は、ついつい「このような環境から、子どもはどのような影響を受けるだろうか」と少しでも環境からもたらされる恩恵を子どもに与えようという想いのもとで環境づくりを考えてしまいがちです。それは大人の善意であることは間違いないのです。

しかし、実際には子どもが発達する過程では環境からの影響を受けるばかりではなく、自発的に環境に働きかけていく能力が発揮されています。この、子どもが自分から環境に働きかけて行為をしていくことを通して、能動的記憶が積み重なり、記憶と行為が結びつき知的理解へと深まっていくのです。更に、そのように理解したことを組み合わせて操作しようとする(予測する)ことで、「こうしたら、こうなるかな?」「～してみよう」という自分の知っていることから、さらに広がりを求めるような創造的思考へと繋がっていきます。ですから、これからは子どもに本当の知的発達を保証していくために、知識を「与える」という教え方や環境の提供だけで「子どもが覚えていく」という学習の仕方ではなく、経験を通した知能の働きを通じて意味を理解したり、子どもが自分で色々考える操作・創造的思考を育てていくということが、子どもの能力開発にはとても大切なことだと言えるでしょう。

このように、知能の発達や知的学習の積み重ねや継続性を考えると、現在の教育のシステムや方法には不思議なことが多いように思いませんか? 現在、様々に行われている幼児教育は小学校教育を前提に、そこでの教科学習を上から下へと降ろしてくるような形で行われることが多いのですが、前述した知的発達過程を尊重するならば、むしろ幼児教育がどのように行われることで小学校教育の土台づくりが十分にできるのか?!という視点が必要です。発達に合わせた学習の連続性をもっと大切に考えた乳幼児期の知的学習の内容や環境づくりを築いていきたいものです。

<あらゆる学習の土台づくりとは?!>

人間が学習し、ある一定の能力を自分の中に育てることをピアジェは「シエマの獲得」と言っています。シエマとは、「過去に獲得したものを他に適応させていく操作活動」です。

例えば、靴のヒモを結ぶことも、目で見ていることと手の操作が協応してできることですが、見ることの働きの中で距離・長さなどを理解し判断することと、手の運動感覚をコントロールする働きというのが、あたかも一つのように働いてスムーズにヒモを結ぶことが出来るのです。この例のように、ピアノを弾くこと、跳び箱が跳べること、などの音楽的、体育的な能力を含めあらゆる教科に様々な経験からシエマを獲得していくことが、能力を得るための基礎力になっていきます。数の多い・少ない、長さの長い・短い、色の濃い・薄い・・・etc 様々なシエマを当てはめて系列をつくり、それらを調節しながら適応させていくことで、それぞれの能力として身についていくのです。このシエマの獲得は、単に教えられるだけでは得ることができないものです。子どもが自分で体験し、自分の感覚を通してそれぞれの働きと働きを結び付けて系列化させていくことができ、はじめて、その子にとってのシエマの獲得となります。

乳幼児期は、あらゆる分野の土台となるシエマの獲得が生活体験によって強化されていくと言っても過言ではありません。では、実際に生活や遊びの中で、どのようにこの知的能力、情動的働きが発達していくのか?!という具体的な教育実践、保育実践について具体的にしていきたいと思います。

各分野の具体的な内容を、このシリーズでは「遊び」の項でテーマごとに紹介しています。合わせてご一読下さい。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

